

● きこえの役割 ●

耳は、ことば、周囲の音、音楽など様々な情報を常に受け入れる窓口です。

例えば、ことばを聞き取り、やりとりするなどコミュニケーションに利用します。また、車のクラクションで危険を回避したり、雨の音で洗濯物を取り込むなど環境を察知して対応します。さらに話し口調や声色など、聴覚を使って相手の気持ちを判断しています。

子どもは、周りのことばを繰り返し聞いて覚えていきます。耳がきこえにくいと、ことばの発達が遅れたり、発音が不明瞭になります。また、周囲の物音が聞えないと起こっていることがわからず不安になったり、人との関わりを避けてしまったりと、情緒や行動にも影響がでます。

言語聴覚士がお手伝いします

ことばの遅れ
聴覚障害
構音(発音)障害
吃音
失語症
高次脳機能障害
音声障害
摂食・嚥下障害
など



『話す・聞く・食べる』ことに
問題がある方やご家族の支援をいたします

一般社団法人
福岡県言語聴覚士会
お問合せ
E-mail
fukuoka_st_730@yahoo.co.jp
またはホームページより
福岡県言語聴覚士会

きこえ

子ども編



● 気になることチェックリスト ●

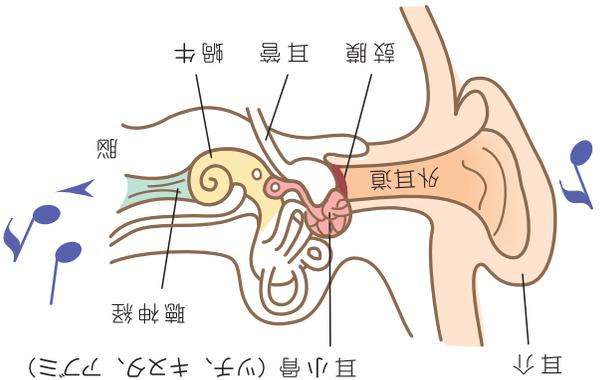
- 名前を呼んでも振り向かないことがある。
- 中耳炎になりやすい。
- テレビの音量を上げたり、スピーカーに耳を当てて聞く。
- 周囲の物音に気付かないことがある。
- なかなかことばがでない。



きこえについて

きこえに<い>状態のことを『難聴（聴覚障害）』といひます。

きこえの仕組み



外耳 中耳 内耳 聴神経 脳

難聴の種類

『伝音性難聴』
外耳道～耳小骨までが障害されると、音が小さく聞えます。

『感音性難聴』
蝸牛～神経・脳に至るところが障害されると、音が小さいだけでなく、歪んで聞えます。

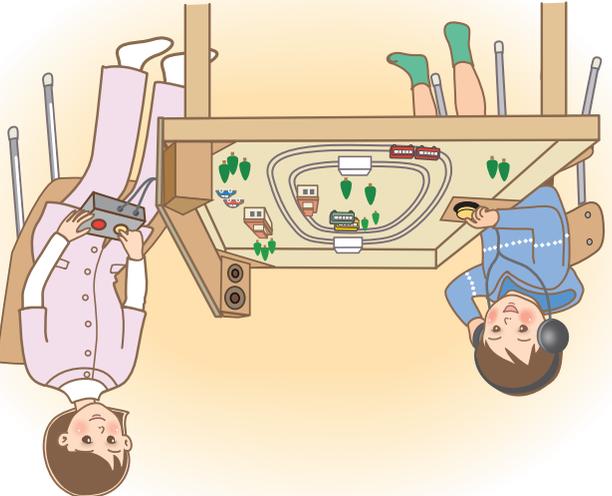
難聴の原因

生まれた時から聞えに<い>『先天性難聴』と、生まれな時は聞えていたが、何らかの原因（中耳炎、髄膜炎、おたふく風邪など）で聞えに<くなる>『後天性難聴』があります。中耳炎によりきこえが悪くなった場合は、中耳炎の治療により、きこえも回復します。

きこえの検査について

どれ<らい>の大きさの音が聞えているか調べるために、きこえの検査（聴力検査）を行なひます。新生児から年齢に応じて様々な検査ができます。きこえの程度は、ことばの発達に影響することもあるので、まずは聴力検査をしましょう。

また、おうちでの情報がとても大切です。日常生活で子どもへの音に対する反応（表情が変わる、泣き出す、振り向<など>）をよ<観察>してみましょう。



『幼児からできる聴力検査の例』

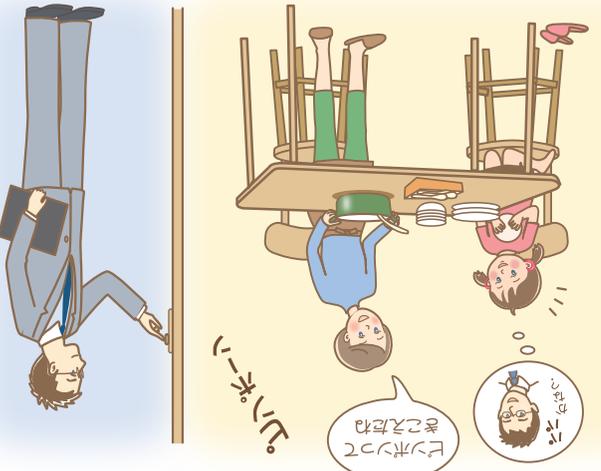
人の話し声が聞きたれない<らい>の難聴がある場合、きこえを補う手段として補聴器や人工内耳（*）があります。ただし、メガネと異なり、補聴器をつけたからといって、すぐ<に>ことばがわかるようになるわけではありませぬ。（*人工内耳とは、手術により電極を内耳に埋め込むことで、きこえを補う方法です。）

ことばの学習

「耳がきこえないから話せない。やりとりができない」といふことはありませぬ。きこえの程度や、子どもの発達の状態、環境により、いろいろなコミュニケーションの方法（実物、絵、写真、ことば、身ぶり）があります。どの方法が子どもにとって理解し、表現しやすいのかを判断していきませぬ。

ことばの訓練では、毎日の生活で身の回りのものや生活体験を、ことばと結びつけてイメージする力を育てませぬ。また、楽しい活動と音を結びつけて、音を聞きたい気持ち育てませぬ。わかったことや感じたことを人と伝え合ひ、豊かなコミュニケーションができるよう促していきませぬ。

このように、ことばを聞<か>、意味を理解する力、人とやりとりする力、自分を表現する力を育てていきませぬ。難聴児専門の通園施設もあり、言語聴覚士、保育士、心理士が対応していきませぬ。



玄関のチャイムを父が押す。シンポと音が鳴る。室内で母子が聞えたね、/い<だ>ねと顔を見合わせている。このように音の意味を学習していきませぬ。